様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：３４６０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３７２００５９

研究課題名（和文）奈良の古代仏像の中世における再受容と再定義

研究課題名（英文）Reception and Meaning of Ancient Buddhist Sculptures in Nara,in the Middle Ages

研究代表者
杉崎　貴英（SUGISAKI, TAKAHIDE）

帝塚山大学・文学部・准教授

研究者番号：３０４６０７４４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、奈良の地において古代に成立した宗教彫像が、その後、中世を通じて改めてどのように受容され、新たな意味づけを付与されたのかを探ることを目的とした。新薬師寺本尊薬師如来像、長谷寺本尊十一面観音像、興福寺南円堂本尊不空羂索観音像などを対象として調査研究をおこない、制作以後の履歴、信仰の様相、神仏習合との関係、言説の形成やその絵画化、模像の制作などについて、具体相の把握を進めた。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to explore the reception and meaning of ancient buddhist sculptures in Nara region during the middle ages. Subjects are the principal image statue of seated Yakushi Nyorai (Skt.,Bhaisjyaguru) in Shinyakushi-ji, the principal image statue of standing Juichimen Kannon (Skt.,Ekadasamukha) in Hase-dera, the principal image statue of seated Fukukenjaku Kannon (Skt.,Amoghapasa Avalokitesvara) in Nanen-do Hall of Kofuku-ji, and so on. This study proceeded to specific clarification about the history of post-production, the aspects of worship, the relationship with Shinto-Buddhism syncretism, the formation and visualizing of discourses, and the production of replica.

研究分野：日本美術史、日本宗教文化史

キーワード：南都　興福寺　新薬師寺　東大寺　長谷寺　春日信仰　縁起・縁起絵　模像

１．研究開始当初の背景

（１）日本美術史研究では、作品成立に関する研究に比して、成立以後の消息を重視あるいは主題化した考察が実践されることは少なかったといえる。しかし近年に至り、美術品の価値形成を問題とした共同研究が実施されるなど（東京文化財研究所編『うごくモノ』平凡社、2004 年）、成立後を探究する重要性についての認識は次第に高まってきた。

（２）日本仏教美術史に関しては、たとえば 2005 年には藤澤隆子「浄土三曼荼羅の再受容」（『マンダラの諸相と文化』下巻、法蔵館）、長岡龍作「仏像をめぐるいとなみ」（『講座日本美術史』第４巻、東京大学出版会）が発表され、前者は表題に「再受容」の語を掲げ、後者は「再定義」という視点を提起している。また、加須屋誠「予告された“往生”の絵」（『死生学研究』第 12 号、2009 年）は、迎接曼荼羅（清涼寺蔵）の伝世過程を追い、意味づけの変化の軌跡を跡づけている。本研究の着想に至る過程では、これらのような近年の研究成果に示唆を受けた。

（３）研究代表者は近年、如上の研究動向を認識しつつ、東大寺二月堂に秘仏として安置される十一面観音像に関する考察を試みた。奈良時代の作品とされるこの本尊が、中世においてどのように眼差され語られたか、さらに機能がどのように変化していったかを、古文書・絵画史料・説話など多様な資料に立脚して跡づけたものである（「臨時的尊像から恒常的尊像へ、そして生身の仏像へ」『京都造形芸術大学紀要』第 12 号、2008 年）。ただし二月堂本尊は絶対の秘仏として不可視的存在だったのであり、古代以来中世においても可視的存在であった著名な尊像に関し、研究を展開する必要を認識するに至った。

２．研究の目的

本研究では、奈良における古代の仏像が、制作ののち数世紀を経た中世において、改めてどのように受容され、新たな意味づけを与えられたのか、その消息を跡づけることにある。奈良に現存する古代の仏像は数多いが、本研究は古代・中世を通じことに重要な存在であり続けた例を対象とする。制作後、都が遷り、社会状況が推移し、宗教界の様相も変化していったことを考えれば、当初の性格が不変のままに継承されたとは考えにくい。むしろ時代の推移のなかで新たな意味づけや役割を与えられ、その社会的存在意義を更新していったのが実態であろう。本研究では、その軌跡をめぐって、彫像、絵画、さらに言説を含む多様な資料を活用し、総合的な調査研究をおこなう。

３．研究の方法

（１）成立以後における履歴についての調査研究。安置寺院における移動・被災・復興といった消息に限らず、貴庶の参詣や模像の制作など、信仰の展開を視野に入れた把握を図る。

（２）像をめぐる言説／イメージの実態把握とその生成過程についての調査研究。寺院と仏像をめぐる由来譚や霊験譚、およびそのイメージを、言説（断片的なものも含む）と、絵巻や掛幅に描かれた縁起絵などから探る。

（３）著名な像の特色ある形姿を模した彫像・画像についての調査研究。日本仏像史上さらには日本宗教史上に名高い重要な存在である興福寺南円堂本尊不空羂索観音像、長谷寺本尊十一面観音像、新薬師寺本尊薬師如来像などを対象とする。

４．研究成果

（１）新薬師寺本尊薬師如来像に関しては、中世における同寺の寺史・信仰・造形についての史資料の把握をほぼ完了した。そこで、創建時の金堂が倒壊し、現存する本堂（国宝）と木造薬師如来坐像（国宝）に寺院活動の中核が移行して以後の寺史を対象とする通観をおこなった。創建以来の東大事末寺／別院としての性格は持続しつつも、南都焼き討ちを契機に興福寺との関係が深まり、鎌倉時代前期における伽藍整備も、興福寺の関与と資材の供給のもとに実施されたと推測された。また、本尊の形姿を模した銅造薬師如来坐像（重要文化財、平成 24 年度に文化庁が購入）が近代まで興福寺に伝来していたことを確認し、上記のような状況下で造立されたと推測できた。また解脱房貞慶の関与による新規造営は寺史上の大きな画期をなし、地蔵堂の造営も貞慶所縁の春日若宮における千体地蔵信仰との脈絡のもとになされたと考えられた。貞慶の著述中に新薬師寺の寺史および本尊に関する言及は見出せなかったが、草創の地たる香山は認識していた可能性を見出せた。ただ本尊に関しては、春日信仰との関係づけがなされることはなかったと判断された。

（２）興福寺南円堂本尊不空羂索観音像に関しては、既知の史資料を総覧する作業と、模像（形姿を模した彫像・画像）の作例についての調査研究をおこなった。そのうち細見美術館所蔵の春日社寺曼荼羅（興福寺南円堂曼荼羅）については、とくにかつて言及された色紙形の和歌の判読に期待をかけたものの、現状では、簡易な手段の赤外線撮影によってもほとんど視認しえず、わずかに数文字が確認できたにとどまった。しかし描写の詳細を把握することができ、九条家旧蔵という伝世

経緯を追認するとともに、類品中でも意義の高い作例であることが改めて理解された。なお実査に際し、所蔵館から展覧会（「麗しき日本の美―祈りのかたち―」、2012 年 2 月 7 日～4 月 1 日）の監修依頼を受け、知見の一部は展示という形で開陳することができた。

また、南円堂本尊を描く絵画作例のうち、これまで公刊図版に恵まれなかった白鶴美術館本春日本迹曼荼羅について、同館が蔵する他の３件の春日曼荼羅とあわせて実査をおこない、宝山寺本および静嘉堂文庫美術館本との比較検討を試みた。さらに月山寺（茨城県桜川市）で、近世には「准てい〔月偏に氐〕観音」と見なされていた未知の画像作例を新たに見出し、中世作例であることを確認できた。

（３）興福寺に関してはもう一件、食堂千手観音像（国宝）について検討した。南都焼き討ち後の興福寺再興造像の掉尾をかざる巨像である。同寺の復興造営における解脱房貞慶の関与は近年注目が高まっているが、この像の再興造像は貞慶没後に再開する。しかしちょうどそのころ、貞慶所縁の観音信仰が、その十三回忌を機に再活性化した状況が考えられた。食堂像の像内納入品および像内墨書銘の文言には、貞慶所縁の観音信仰の影響が確認され、再興造像における新たな意味づけを見出せた。この成果については、貞慶ゆかりの海住山寺より依頼を受けたのを機に成稿・提供し、ホームページにて公開された。

（４）長谷寺本尊十一面観音像に関しては、中世再編の縁起とそこに語られた造像譚に重点をおき、かねて進めていた言説（およびその絵画化）の面からのアプローチを中心として調査研究をおこなった。中世の霊験仏に関する縁起では、一般に専業仏師による造像過程が述べられることは稀である。そのなかで長谷寺縁起に関しては、固有名を伴う古代の仏師（稽文会・稽主勲）による造像譚と、彼らを神仏の化身とする言説が注目された。縁起の再編や、興福寺・春日社における神仏習合／本地垂迹説との関係といった背景に加え、彼らの史的実在性の稀薄化なども前提として考えられた。また、中世再編の長谷寺縁起からの影響が指摘できる誓願寺縁起・矢田地蔵縁起、さらに縁起成立時において直近の過去に実在した仏師（運慶）が登場する頬焼阿弥陀縁起、仏師定朝による造像が語られる壬生地蔵縁起などを参照することで、長谷寺縁起における造像譚の特色をより鮮明に把握することができた。以上に関しては、日本宗教文化史学会大会にて口頭発表をおこなう機会を得た。またその際には、配付資料として発表で論じた範囲に関する史料集を編集作製し配布した。

また長谷寺形（長谷寺式）の十一面観音については、近年に詳細な調査報告が公刊されたパラミタミュージアム像（長快作）とともに、やはり近時に古例として評価された宝樹院像（常滑市指定文化財）を実査したほか、東北地域・瀬戸内地域などの遠隔地に伝播した長谷信仰を証言する諸作例についても、実見と資料収集をおこなった。

長谷寺縁起絵巻に関しては、鎌倉市長谷寺本（神奈川県指定文化財）およびそれとの一具性が指摘される群馬県立歴史博物館本（同県白岩山長谷寺旧蔵、群馬県指定文化財）の実査と、中世成立の諸本のうち唯一概要情報すら不足していた和泉長谷寺縁起絵巻（大阪府指定文化財）の実査を特筆しておきたい。これにより既存の公刊における翻刻を正し、諸本間の相違の確認を推進できた。また鎌倉市長谷寺では、あわせて近時確認された長谷寺縁起文（鎌倉市指定文化財）も実査した。

（５）その他、法隆寺、東大寺、橘寺など大和諸寺の古代成立尊像に関しても史資料の収集・検討を進めたほか、研究期間中に機会を得て関わった展覧会等の企画に際し、本研究における視点と方法の応用を随時試みた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）

① 杉崎貴英、「峰定寺釈迦如来像の研究史―像内納入品・宋風・慶派仏師・俊乗房重源・解脱房貞慶―」、『GENESIS 京都造形芸術大学紀要 2010』、査読有、第 15 号、2011 年、pp.189-212

② 杉崎貴英、「蓮の実を用いた祈りのかたち―数珠・副葬・像内納入品―」、『Kabunken News Letter』、査読無、第 6 号、2012 年、pp.7-13

③ 杉崎貴英、「中世の新薬師寺をめぐる信仰と造形―本尊・興福寺・貞慶・春日・香山―」、『博物館学年報』、査読無、第 44 号、2013 年、pp.40-86

④ 杉崎貴英、「達身寺木彫仏群について」、『講座「丹波学」講義録』、査読無、平成 24 年度、2013 年、pp.12-16

⑤ 杉崎貴英、「峰定寺阿弥陀三尊像の伝来をめぐって―水無瀬御影堂旧在の後鳥羽院関係仏か―」、『日本宗教文化史研究』、査読有、第 17 巻第 1 号、2013 年、pp.35-54

⑥ 杉崎貴英、「仏師運慶建立の私堂 地蔵十輪院をめぐる再検討―六波羅蜜寺地蔵菩薩坐像の伝来問題に関連して―」、『GENESIS 京都造形芸術大学紀要 2012』、査読有、第 17 号、2013 年、pp.166-181

⑦ 杉崎貴英、「中世越中の宗教文化に関わる資料拾遺―富山県外所在・転出の在銘作例を中心に―」、『富山史壇』、査読有、第171号、2013年、pp.48-63

⑧ 杉崎貴英、「細見美術館蔵「東寺食堂千手事」（嘉禄三年成賢注進状）をめぐって」、『日本宗教文化史研究』、査読有、第18巻第1号、2014年、pp.62-75

⑨ 杉崎貴英、「浄土宗（玉桂寺旧蔵）阿弥陀如来像とその像内納入品の研究のために―関連書誌および結縁交名比定・論及一覧―」、『GENESIS 京都造形芸術大学紀要2013』、査読有、第18号、2014年、pp.181-194
https://kyoto-art.repo.nii.ac.jp/

⑩ 杉崎貴英、「解脱房貞慶の影響下の造像に関する拾穂三題―峰定寺釈迦像・福智院地蔵像・興福寺菩提院旧在釈迦像―」、『奈良学研究』、第17号、2015年、pp.45-62

〔学会発表〕（計2件）

① 杉崎貴英、「中世の霊験仏縁起と仏像制作者の介在―長谷寺縁起・頰焼阿弥陀縁起を中心に―」、日本宗教文化史学会 第17回大会、2013年6月22日、京都女子大学J校舎5階525教室

② 岡本篤志・田川新一朗・杉崎貴英、「達身寺木彫仏群の三次元計測調査」、文化財保存修復学会 第35回大会、2013年7月21日、東北大学百周年記念会館川内萩ホール

〔図書〕（計4件）

① 杉崎貴英 他 執筆（富山県［立山博物館］編・刊）、『特別企画展 立山と帝釈天―女性を救うほとけ―』展示解説書、2013年、64頁

② 杉崎貴英 他 執筆（千光寺展ワーキンググループ編・千光寺展実行委員会刊）、『越中真言の古刹 芹谷山 千光寺展』図録、2014年、88頁

③ 杉崎貴英 他 執筆（大手前大学史学研究所編・刊）、『達身寺仏像群調査報告書』〈大手前大学史学研究所研究報告書第15号〉、2015年、212頁

④ 杉崎貴英 他 執筆（富山県［立山博物館］編・刊）、『北陸新幹線開業記念 立山の至宝展』図録、2015年、8頁

〔その他〕
ホームページ等（計3件）

① 杉崎貴英、「貞慶上人をめぐる霊山浄土信仰の造形」、海住山寺ホームページ＞「解脱上人寄稿集」vol.51、2012年
http://www.kaijyusenji.jp/gd/kiko/sentence/k51.html

② 杉崎貴英、「貞慶上人と石清水八幡宮の丈六阿弥陀像」、海住山寺ホームページ＞「解脱上人寄稿集」vol.52、2012年
http://www.kaijyusenji.jp/gd/kiko/sentence/k52.html

③ 杉崎貴英、「貞慶上人没後の造像にみるその遺響―興福寺食堂千手観音像の場合―」、海住山寺ホームページ＞「解脱上人寄稿集」vol.52、2013年
http://www.kaijyusenji.jp/gd/kiko/sentence/k53.html

６．研究組織

(1)研究代表者

杉崎　貴英（SUGISAKI TAKAHIDE）
帝塚山大学・文学部・准教授
研究者番号：30460744